

# 美術館や児童館施設等の創造活動の役割 — 先行事例や現地調査などにより考察 —

戸潤 幸夫

## The Role of the Art Activities Such as Art Museum and Child Building Institutions: A Study and a Field Work on Precedents

Yukio TOMA

### I はじめに

地域再生の核として、文化活動を取り入れ街の活性化を図っている地域が増えている。瀬戸内国際芸術祭や金沢アートプラットフォームの活動、新潟県では越後妻有の大地の芸術祭、新潟市の水と土の芸術祭などである。これらの活動では、アーティストと地域住民が協働で作品づくりをしたり、アーティストがワークショップを行ったり、地域の人がアーティストに作品展示の場所を提供するなどをし、作品を通じ交流等をしている。

また、子育ての豊かな体験の場として、東京青山にあるこどもの城、浜田市世界こども美術館や金沢21世紀美術館など全国的にチャイルドミュージアムといわれる創造性を育む目的の施設が増えている。これらの施設の中で、保育・幼稚園、小学校・中学校・高等学校の中の美術教育や造形表現では体験できない創造活動を行っている。

そこで、学校教育の授業としての「図画工作」・「美術」以外で、社会における造形・美術教育がどのように実践されどのような役割を担っているのかを、先行事例として特に顕著な活動をしている美術館教育といわれる美術館の諸活動を文献等で調べるとともに今年度開催された子どものための展覧会の分析、また、チャイルドミュージアムとして全国的にも知名度の高い4施設の現地調査、今年度筆者が行ったワークショップの実践を通して研究することとした。社会における、子どもたちにとつての望ましい創造活

動のあり方が明らかになればと考えた。

### II 美術館教育について

社会における美術活動で大きな役割を果たしているのは美術館教育と言われる美術館で実施されている活動である。そして、その活動に最も貢献度が高いひとりにビクトル・ダミコ氏(初代ニューヨーク近代美術館教育普及部長)がいる。それらのことについて記すこととする。

#### 1. 美術館教育の歴史

1970年代後半から日本の全国各地で美術館建設ラッシュとなり、各県に公立美術館が誕生した。各館は独自の個性を持たせるため目玉のコレクションを所蔵し、その作品を子どもたちや一般の方々にも理解できるように鑑賞のためのワークシートなどを開発し始めた。1980年代では、小中高等学校の図画工作、美術の学習指導要領の改訂により、鑑賞教育の充実が重点を置かれるようになった。そのため、各県の造形美術教育研究会に所属する教員と美術館の教育普及を担当する学芸員が協力し、教育プログラムを開発することにより、多くの学校で美術館を活用するようになった。

美術館教育で主になるものは、鑑賞のためのワークシート活用、展示作家や学芸員による作品解説等のギャラリートーク、地域のアーティストとの創作活動を行うワークショップ、子ども向けに分かりやすいコンセプトで技法や鑑賞の仕方が身につかせるための「子どものための展

覧会」企画などがある。

## 2. ビクトル・ダミコ

美術館教育が、今日日本の美術館に定着するようになったが、なんと言っても大きく影響を与えたのはビクトル・ダミコである。

プラザ・サハスラブドゥヒ（コロンビア大学美術教育科助教授）は、こどもの城が1995年に開催したビクトル・ダミコこどもアートカーニバル in Tokyo の展覧会カタログに次のように記している。「ビクトル・ダミコは、1937年から32年間ニューヨーク近代美術館の教育普及部長として、今日の美術館教育の基礎と言える活動を行った。1944年に出版された『創造的美術教育法』では、『美術には人間性を高める力がある』という信条に基づき、教育法を記した。その本の中で『子どもが美術家として作品作りができるように援助しなくてはならない。正しい学校環境の下では子どもは美術家のように手法と素材を研究しながら、自分が持つ限りの力を発揮して創作活動ができなくてはならない。』

そして、美術の基本とは、個性が発達すること。美術作品や人間関係や自分の周囲の美的なものに気づく力を持つことである。ジューン・ブランドが『子どもの美術 (Art of Young Child)』の本の中で次のように言っている。「子どもに次のような機会と時間を与えることが美術の基本であること。いろいろな経験ができること。状況や環境をつくって素材や手法を自由に選ぶことができる。自分の経験を自由に表現できること。発見のための形式を見つけること。幼い子どもたちに機会を与え、好きなように表現しなさいと励まし声をかけること。子どもが作ったものを受け入れ尊重することは基本である。必要な技術を学ぶことは基本である。」

ビクトル・ダミコが日本の美術館教育に大きく影響を与えたのは、1942年から実践している「こどもアートカーニバル」の活動である。ダミコは、「こどもアートカーニバルは、冒険的試みで、子どもたちが言葉だけを通す以上に、自分たちの感覚、特に触覚や視覚や筋運動感覚を通して、よりよく理解できる。」と述べている。このことは、現在世界中の博物館や美術館、

科学館等で取り入れられている展示物を触ったり、実際に手に取り使用するなどハンズ・オン型の展示方法に示唆を与えていると思われる。

また、こどもアートカーニバルは2つの活動場所を設定した。一つ目は、「動機づけエリア」である。いろいろなおもちゃで遊んだり、ゲームを行う。ここで子どもたちの創造心を奮い立たせることになる。この活動によつて子どもたちの心の重荷になっている、ありきたりの表現、きまりきった表現がすっかり取り除かれることになる。二つ目は、「ワークショップエリア」である。ここで子どもたちは自分の思うままに絵筆を動かしたり、コラージュを作ったり、工作することができる。そばには経験豊かでよく訓練された教師たちが励ましてくれる。

ダミコがこどもアートカーニバルで「二つの重要性」を強調している。

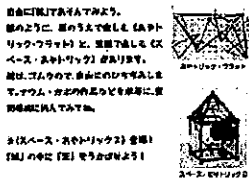
1. どの子ども、それまでの環境や経験には関係なく、この実践で創造力をつけることができた。自由にダイナミックに創造力をつけるというアプローチは、知識を詰め込む教育に打ち勝つことができるのである。
2. 民族の違いや国の違いとは全く関係なく、子どもの創造力は伸びていく。創造力のある子どもを育てるには、創造的な教育が必要であり、もし創造力のない子どもが育てているなら、それは教え込む教育をしたからである。

この二つの重要性やこどもアートカーニバルの動機づけエリアのアート・ティーチング・トイ（美術教材としてのおもちゃ）は、1991年セゾン美術館と東京都図画工作教育研究会が共同開発した13種類のアートツールや富山県立近代美術館が「20世紀美術の流れ」を分かりやすく鑑賞させるため開発された子どものための鑑賞教材「きんぴアート・キット」などに共通点を見いだすことができる。

また、動機づけエリアで実践された五感を刺激し、創造性を広げる体験のコンセプトは、近年各美術館で企画されている「子どものための美術展」の内容にも色濃く影響を及ぼしていると言える。

ワークショップエリアで実践された、壁に固

**おやトリック**



**絵画キョーブ**

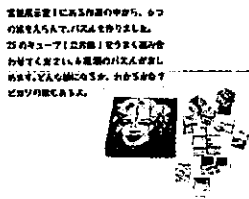


写真1  
「富山県立近代美術館  
きんびアート・キット  
活用術パンフレット  
より抜粋して転写」

定されたイーゼルと何色かの絵の具の入った缶が用意され、子どもたちの思いや願いを自由に表現させる方法、コラージュのためにいろいろな材料を準備し、素材の形、色彩、堅さ、質感等を生かして表現していく手法は、日本の小学校で実践されている、造形あそびや材料をもとにして作りたいものを作るの基礎となっている。

また、芸術を通しての幼児教育を実践し世界的に注目されているイタリア・レッジョエミリア市の幼稚園・保育所の活動や環境構成に共通点が多く、大きく影響を与えたものと思われる。

イタリアレッジョエミリア市の幼稚園・幼稚園では、40年以上アートを中心においた幼児教育が実践されてきた。各幼稚園・幼稚園には教育学者（ペタゴジスタ）と芸術専門教師（アトリエリスタ）が保育担当者とチームを組み子どもたちの教育プログラムを作成し、実施している。中世の趣のある街の中で、ダミコが子どもアートカーニバルに設定した動機づけエリアのような感性を刺激するような環境の中、子どもたちは様々な素材に触れたり、仲間と交流しながら創作を通してコミュニケーションをし、豊かな表現力を身につけている。子どもたちは保育者の指示で活動するのではなく、子どもたちの自発性にゆだねられた活動は、まさにアーティストが自分のイメージを具現化させていく行為そのものである。このようにビクトル・ダミコ氏の考えが反映されていることが伺える。

以上のように、ビクトル・ダミコ氏の社会における美術教育の影響は、今も色濃く残っているとと言える。

3. 子どものための展覧会

美術館教育として、芸術作品を子どもたちに親しんでもらうために大きな役割を担っているのが「子どものための展覧会」企画と思われる。今年度注目すべきものとして「こどものにわ」というタイトルの子どものための展覧会が、2010年7月24日から10月3日まで東京都現代美術館で開催された。20数年頃前から日本の美術館でも「子どものための展覧会」が開催されるようになり、ハンズ・オン型の展覧会で、会期中ワークショップやギャラリートーク等の企画で親子で賑わう光景を目にした。ただ、多くは小学生以上の子どもたちを対象にしているものであった。

今回の「こどものにわ」展は、乳幼児を対象にした展覧会であり、その展覧会に先駆けて子育て支援センターや児童館、保育園の乳幼児や保護者とのワークショップを開催し、そこで作り上げたものが展示された。

これまで0歳の子どもが保護者と一緒に美術館で楽しむことはなかったように思う。この展覧会では、自然に視界に入ってくるものを楽しんだり、自分の体の動きが映像作品に反映したり、自分自身が作品の一部となったり、子どもの感性を育む行為とは何か、創造的活動とはどのようなものか乳幼児の保護者に問いかける展覧会であった。

親が、自分の子どもがどんなことに驚き、どんなことに興味を持ち、楽しいと感じるのかを知る展覧会であり、アートを理解しようとするのではなく、親子でからだ全体でアートを感じることの大切さに気づく貴重な体験となる展覧会である。また、幼い頃から美術館で本物の作品と触れ、親子で鑑賞の仕方にも身につく点でも素晴らしい企画展と思われる。

Ⅲ 現地調査した美術館・児童館について

チャイルドミュージアムと呼ばれる、子どものための美術館鑑賞やワークショップ等で活発に活動し全国的に知られている4つの美術館・児

童館を現地調査した。

### 1. こどもの城 (児童館)

所在地 東京都渋谷区神宮前

こどもの城は、1985年厚生省が計画・建設した施設である。毎年約100万人が利用する。芸術・科学・体育・保健・保育など子どもの文化と福祉のための総合施設である。施設には、体育館・プール・フリーホール・レストラン・ギャラリー・造形スタジオ・プレイホール・ビデオライブラリー・音楽スタジオ・保育室・研修室・パソコンルーム・屋上遊園・劇場・小児保健クリニックをもつ、地下4階、地上13階の建物である。

3階にある造形スタジオは、日本におけるワークショップの草分け的存在である。ここでの活動方法は、まず素材集めをし、その様々な素材と子どもとを出会わせるワークショップ「素材との出会い展」、もう一つは、素材だけだと視野が狭くなるため、光とか音とか五感を刺激する造形活動であるワークショップ「造形発見展」、素材と道具と技術をわかりやすく体験できるワークショップ「オープンスタジオ」が設けられている。子どもたちはその日の活動内容を見ながら自由に制作したいものを選択し、スタッフの簡単な説明を聞いた後、それぞれ思い思いに活動するスタイルである。基本的にはスタッフがそばについて手ほどきをすることはない。親子で楽しみながら試行錯誤して制作している。

こどもの城の造形スタジオで人気のある活動は、「落書きウォール」という10数m×2m位のホワイトボードに缶に入った赤・黄・青色の3色で自由に落書きをさせる活動である。

また、こどもの城では5年に一度フランツ・チゼック展、ブルーノ・ムナーリ展、ピクトル・ダミコ展など美術教育を先駆的に進めた人たちの業績を紹介しているところが他のチャイルドミュージアムと言われるところにはない試みとして価値が高いと思われる。このことは現場の美術教師を覚醒させ、真に創造性を高める造形活動とはどのようなものかを気づかせ、また、教材開発のヒントにもなるからである。

### 2. 浜田市世界子ども美術館

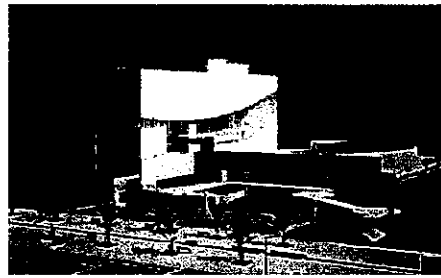


写真2 浜田市世界子ども美術館の外観

所在地 島根県浜田市

浜田市世界子ども美術館は、1996年11月にオープンした。「みること、つくること」をコンセプトに様々な展覧会を開催すると共に、創作活動に力を入れ、子どもたちの創造力を養い、感性を育ててきた。現在は、財団法人が運営し、スタッフは市職員1名、財団職員2名、嘱託職員1名で運営している。日本海に漂う創造と美の船をコンセプトに5階建ての建物は青い空に白い建物がくっきりと浮かび大変美しい。

施設内容は、展示室として3F郷土作家作品の展示、4・5F巨匠の作品・世界の児童画等の展示スペース、多目的ホール(憩いのスペース、展示会、集会等に利用)、創作室(絵画・彫刻・版画・木工・陶芸スペースで構成、仕切りのないワンフロア)、収蔵庫、図書室(絵本・子ども向け画集・技法書等を所蔵)の構成となっている。

浜田市世界子ども美術館の活動は、展覧会企画とワークショップ等の創作活動である。学校利用のためのプログラムにより、1クラス単位で活動し、保育園・幼稚園・小学校で利用している。また、ホリデー創作活動として、土日いろいろな工作などの講座開設(材料費徴収)がされている。年間利用者数は、約54,000人である。

建物全体からデザインセンスが磨かれるような雰囲気である。展示室には、コレクションIとして写真3にあるような古今東西の巨匠たちが「子どもの頃に描いた作品」や「子ども心を感じさせる素朴でユニークな作品」が展示されている。子どもたちが、これらを作品鑑賞することにより感性が磨かれ、創作意欲や美意識が育まれると感じた。コレクションIIとして写真4

にあるような世界の子どもたちの絵を展示している。子どもたちの自由な発想に満ちた作品を世界各国から収集し、たとえ言葉が通じなくても、それぞれの国の風土や生活の様子を感じ取ることができる。また、それぞれの国の子どもたちの表現方法やテーマの違いなど多様性にも気づかせることができる工夫がなされている。

また、写真5にあるように、毎年「浜田子どもアンデパンダン展」として、全国の小学生対象に作品を募り展示している。一般的な児童画展と異なるのはアンデパンダン形式のため審査

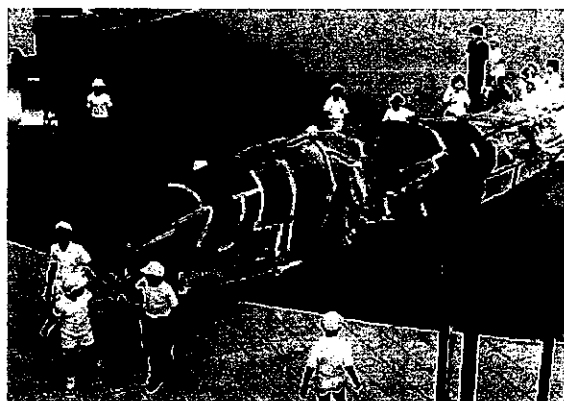


写真6 巨大バルーンづくりの光

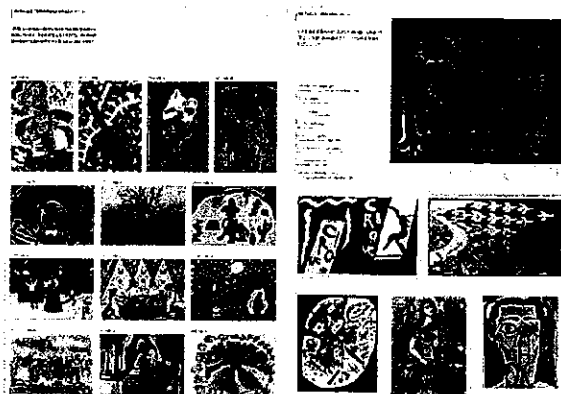


写真3 巨匠の作品

写真4 世界の児童画

は行われず、応募作品すべてを展示することにこの館のポリシーが伝わる。また、平面、立体、個人作品、共同作品など一切問わないところが表現の自由を保障し、創造活動を大切にしたいという願いが、写真5のようにどの作品も個性的で表現方法も自分の表したい内容に合わせて選択されていることに結びついている。

平日の活動であるミュージアムスクールでは、幼稚園、小学校の子ども対象にダイナミックで新鮮な題材を取り入れ、館の専門スタッフの支援により造形遊びや工作など楽しく活動

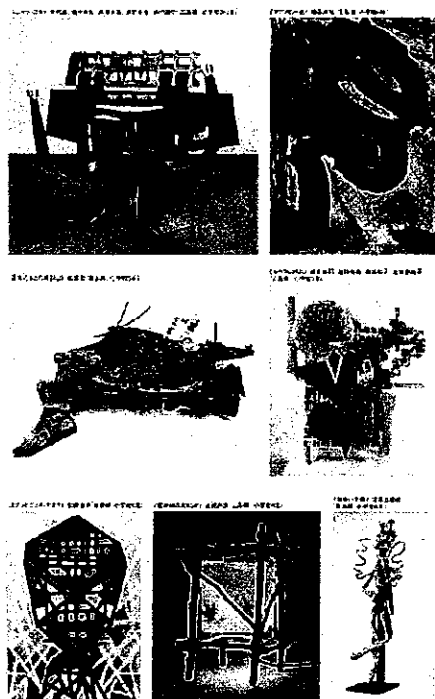


写真5 「浜田子どもアンデパンダン」出品作品

\*写真3～5は浜田市世界子ども美術館パンフレットより転写

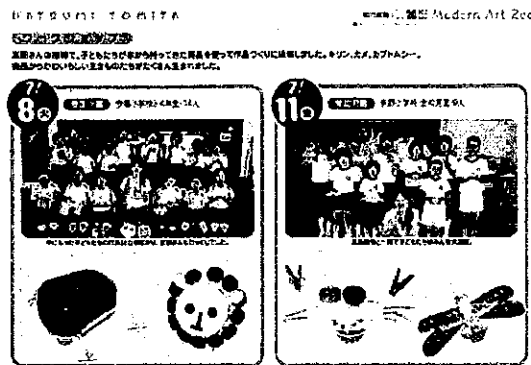


写真7 現代美術の動物園記録集より転写

し、学校では味わえない大きな感動が得られる工夫がされている。

また、2008年7月5日から9月15日まで開催された「現代美術の動物園」では、写真7のように出品作家であるアーティストが会場で実際に制作しているところを公開したり、アーティスト自らワークショップの指導者として一緒に活動している。子どもたちにとって本物に触れることで、素材の生かし方、イメージの膨らませ方、アーティストの制作にかける思いが直に伝わり、自分自身の制作のヒントとなると同時により豊かな感動体験となり、美術に対する興味・関心が強くなるものと思われる。

### 3. おかざき世界子ども美術博物館・親子造形センター

所在地 愛知県岡崎市

おかざき世界子ども美術博物館・親子造形センターは、現在社団法人が運営している。スタッフは、美術博物館7名（内学芸員1名）、親子造形センター11名である。

施設は、展示室が4室あり、有名美術家の10代の作品展示、企画展示、小中学校の図工美術担当者の協力により造形おかざき展の出品作品が展示されている。

創作室は、EBアート、絵画、粘土、工作の4室である。その他、視聴覚室、収蔵庫、図書室、ミュージアムショップ、喫茶室が館内に配置されている。野外には、ふれあい広場（グラウンド）、野外ステージ、芸術の森、アスレチック遊具、庭園とゆったりとした広さである。駐車場200台分が確保されている。

活動内容としては、子どものための企画展示、常設展示、創作活動である。教育プログラムを作成し、市立幼稚園5歳児と小学校4年生は、必ず利用するシステムとなっている。

一般利用者は親子で自由に各創作室の材料を購入し、制作するシステムである。年間利用者数は約13万人である。

この施設の特徴は、小高い山を切り開き、自然豊かなところで1日芸術に触れたり、遊具や森、グラウンドで遊んだりゆったりできる親子の居場所となっている。地元の図工美術を担当する教員で組織されている造形教育研究会との交

流により、地元の子どもの作品を展示することで出品者の家族の入館を増やすなど工夫が見られる。有名美術家の10代の作品展示することにより美術への興味やあこがれを育てている。また、岡崎市の子どもは一度必ず訪れた経験から、リピータもあり利用度も高いと思われる。社団法人が運営しているが、市との連携もスムーズにできているのも運営・運用の充実に繋がっている。

### 4. 金沢21世紀美術館

所在地 石川県金沢市

金沢21世紀美術館は、「新しい文化の創造と新たなまちの賑わいの創出」を目的に2004年10月4日にオープンした。ミュージアムとまちの共生により、新しい金沢の魅力と活力を創出することをめざし、金沢芸術創造財団が運営している。円形ガラス貼りの美術館は、そのものがアートとなっている。

館の所蔵作品は、世界の「現在（いま）」とともに生きる美術館をミッションに掲げているとおり、時間や空間を超え、従来のジャンルを横断する多様な表現の作品で構成されている。これらの芸術作品に触れ、体感することで、未来への創造に繋げようとしている。

「子どもとともに、成長する美術館」のミッションの具体的な取り組みとして、金沢市内小学校4年生全児童招待プログラムを金沢市教育委員会選出（小学校図工担当3名中学美術担当2名）教員と美術館側と検討委員会を設立し開発している。ミュージアムクルーズと命名し、美術館鑑賞を行う。ギャラリートークのスタッフは研修を受けたボランティアが担当する。現代美術を五感で感じ鑑賞することにより、創造力を育み、主体的に鑑賞する態度を養っている。来館した子ども達に「もう1回券」という招待券を配布することにより、何度も美術館を訪れるような工夫がされている。子どもと一緒に親も鑑賞に訪れることにより、親子で美術に関心が深まるものと思われる。

また、この美術館の美術教育上きわめて効果的と思われるのが、美術館の庭に仮設アトリエが設置され、著名な現代作家が展覧会会期中長期に滞在しながら制作している様子を見ること

ができることである。鑑賞者は、美術作品がどんな環境の中で、どんな材料・道具を使い、どのように主題を深めながら完成していくのか制作過程を直に見ることができる。長いスパンでその作家について調べること、より深く美術を理解したいという興味・関心を育むことができることに価値がある。そして、その作家とともに、ワークショップで作品づくりの活動をし、完成作品を美術館で展示されることは、自分でも仲間と一緒にこんな素晴らしいものが作り上げることができたのだという自己肯定感を味わわせ、未来に生きる子ども達の豊かな感性と創造力が育まれる有意義な活動となっている。

この館のミッションである「まちに活き、市民とつくる、参画交流型の美術館、地域の伝統を未来につなげ、世界に開く美術館」は、金沢城・兼六園・県内一の繁華街の近くという観光スポットにある立地条件を生かし、県内外から多くの来館者が訪れ、国内外の美術館関係者の視察者も多く、そのことで文化香る金沢市民の誇りとなる施設となっていることから実現されたと言える。文化を大切に、人との交流ができる次代を担う人づくりに役立っていると感じた。

#### Ⅳ 実践したワークショップ

筆者が今年度実践したワークショップの中から、美術館とこども創作館、公民館の各場所におけるワークショップの社会における美術活動の役割を考察した。

##### 1. 国立新美術館でのワークショップ

2010年5月29日に、東京乃木坂国立新美術館3階研修室にて親子創作教室が、第一美術協会公開研修会として開催された。親子13組と一般参加者の合計30数名参加のワークショップを実践した。活動内容は、写真8のワークシートにあるようにコラージュ技法によるしおりづくりである。参加者は、事前の案内と当日の館内放送で興味を示した、5歳から小学生の子どもたちとその家族、そして、一般成人である。このように幅広い年齢層を対象としたワークショップで、1回完結型ではそれぞれに合った創作活動を仕組む必要があった。造形経験や

発達段階に合わせて創作ができるような環境構成が重要となる。時間もフリーなために、短時間でもそれなりの満足が得られる工夫が大切になる。

はらべこあおむしのエリック・カールさんにまけないぞ！  
つくるじゆんじよ

- ① どんなものをあらわそうか、ざらがみでえをえがきながらかんがえる。
- ② なにをあらわすかきまったら、すきないろのかみをえらぶ。
- ③ どのぶぶんに、どのもようがみつつかかかんがえてひつようなおおきさにおおまかにきる。
- ④ もようつきかみをあらわしたいかたちにきり、のりではる。いろんなかたちでできるあなあけばんちをつかっできり、はつてもよい。
- ⑤ くれよんやいろえんぴつでかたちをととのえる。
- ⑥ らみねーとをしたあと、はとめばんちであなをあける。
- ⑦ はとめをとめたあと、りぼんをむすんでかんせいです。



\* ひとりなんまいつくつてもかまいませんが、ひとがおくあつまってきたらこうたいていください。また、12じ30ぶんにかたづけしゅうりようとなります。ようちえんやがつつこうとちがうのですきなじかんにおかえりください。また、このばしょはたべたりのんだりはできません。

写真8 新国立美術館でのワークショップで使用したワークシート



写真9 国立新美術館でのワークショップの様子

美術館でのワークショップは、美術鑑賞をし創作意欲が高まり、創作に対する動機づけがなされたところでの創作活動となる。美術に興味関心をより深めてもらうためにも、ワーク

ショップにおいて創作することの楽しさを味わってもらうことが大切になる。また、都会にあるモダンなデザインの美術館で、始めて出会った人たちと一緒に創作し交流を持ちながら作品づくりすることは、子どもの豊かな体験となり感性を育むだけでなく、異年齢のいろんな表現に触れることとなり他者理解、そして、他者から自分の個性がどのようなものか考える機会となり自己理解が深まると思われる。そのような点からも美術館におけるワークショップの役割は大きいと実感した。

## 2. 子ども創作館でのワークショップ

2010年に3月1回、8月2回、11月1回の計4回のワークショップを、新潟市東区にある子ども創作館で行った。子ども創作館では、対象を5歳児から小学生とし15組の親子を市の広報を通じて募集した。このような施設を利用している親子の特徴は、当然創作することに興味があり、絵を描いたりものを作ることが得意な子やその親である。保育園・幼稚園・小学校より少し専門的で、今まで経験したことのない題材や技法、材料にふれる目的で参加している。

このような施設でのワークショップの難しさは、保育園・幼稚園児と小学生の発達の違い、小学生でも低学年と高学年では興味をもつものが大きく異なること、特に高学年では男女の性別によっても異なってくる。どんなテーマでどんな材料、技法で活動するのか事前の準備が大切である。

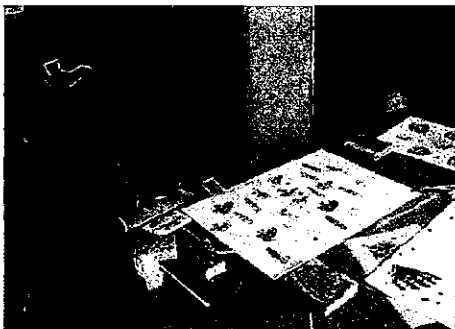
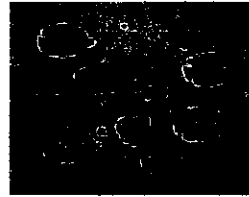


写真10 子ども創作館でのワークショップの様子

また、活動の始めに行う説明では、年齢差も考慮し言葉を選びながら話す必要がある。また、参考作品を提示する時は、それぞれの発達段階で自分でもできる、あんなの作りたいと思わせ

### 活動テーマ 「ペタペタ押し、最後はシャボン玉」



#### つくりかた

- ①うすい紙にどんなかたちの版をつくるか考えながら描く。
- ②かたちが決まったらステレン版に鉛筆やわりばしペンで描く。
- ③つぎに、かたちのまわりをはさみで切る。
- ④台にステレン版を両面テープで貼る。
- ⑤なまえのはんこをつくる
  - ・なまえをマジックで紙に書く。
  - ・紙を裏返し逆さ文字を見ながらなまえをステレン版に鉛筆やわりばしペンで書く。つぎにステレン版に両面テープで貼る。
- ⑥好きな色のスタンプ台をえらび、画用紙の上に、ペタペタと押ししていく。2～3色くらい色を変えて押す。
- ⑦スタンプが押された両面の上に、紙コップの中に好きな色が入ったシャボン玉液を選びシャボン玉を飛ばして遊ぶ。
- ⑧なまえのはんこを押して完成。

写真11 子ども創作館で活用したワークシート

る期待を抱かせるものを準備する必要がある。制作過程で、自分の思い通りに行かない時に少しアドバイスをするサポーター役の人材も大切である。

子ども館や児童館施設でのワークショップの役割は、広報等の案内により活動内容に魅力を感じた子どもや親子が主体的に参加した活動であり、普段からここでの活動を楽しみにしていたり生き甲斐としている場合もあると思われる、そのようなニーズに応えるべき活動となることである。

子育て中の保護者にとって、子どもたちに創



写真12 上越市保育園協会夏期研修会の様子



造性が高まる活動や心豊かになる体験をさせることが多くの願いとなっている。

子どもたちにとっても、余暇に自分の興味関心が高く、自分の個性や能力を高めることのできる子ども創作館や児童館での創作活動は重要である。

子ども創作館や児童館での創作活動の役割は、地域密着型で親子が創作を通して互いを認め合ったり、他の子どもたちの中で自分の子の個性を知る面からも大切であると思われる。

写真 11 のワークシートにある内容を、子ども創作館と同様の方法で、2010 年 9 月に上越市立保育園協会の夏期研修会として、保育士たちにワークショップを通じて造形表現のあり方をレクチャをした。約 150 名の保育士が、3 グループに分かれ 3 m × 3 m の大きな紙に思い思いに創作していた。制作を通して、保育士同士が交流し、創作の楽しさを味わえたことが活動後の受講者の感想から伺えた。

保育者という立場で、子どもになりきってワークショップに参加している姿は、子ども創作館での子どもたちや親子の様子に近いものを感じた。

### 3. 地域の文化活動としてのワークショップ

新潟市西蒲区の角田浜コミュニティ企画 2010 はまめぐり秋のイベントで、越前浜公民館にてワークショップを行った。



写真 13 2010 はまめぐり秋のイベントのワークショップの様子

参加者は西蒲区のホームページや市の広報で募集した 15 名である。参加者は、地域の町おこしイベントの一環としてのワークショップのため遠くからの参加もあった。活動内容が少し高度なため小学校高学年以上大人までを参加対象とした。実際には、地域のお祭りの賑わいもあり小学校低学年の子どもも交じっていた。

このイベントは、西蒲区角田浜、越前浜に在住するアーティストがそれぞれの工房を開放し、それぞれの興味に従ってマップ片手でまちをめぐる活動である。3 年目となり、このイベントは地域にかなり定着してきた。たくさんの観光客風な見知らぬ人が、この地域を歩いている様子が期間中見ることができた。

このイベントの企画協力している人から依頼があり、活動内容についても動物画イラスト制作のワークショップをしてほしいと要望があった。

参加者は、自由な時間にこのワークショップをし、自分の判断で次に移動する方法をとっている。誰でも創作ができ、それなりの完成度と楽しさを求められるこのワークショップはやや難しい面があると感じた。ただ、活動時間が自由なため、創作している人数は数名と個別指導的なため、参加者とコミュニケーションが取りやすくイベントの目的は達成できたと感じた。

完成作品は、後に新潟市立越前浜小学校の文化祭で展示されていた。

## V まとめ

これまで述べてきたように、現在は、保育園・幼稚園・小・中・高等学校などの保育や教育機関だけでなく、美術教育や造形活動は社会全般に広がっている。特に、美術館教育で代表される美術館の役割は大変大きく、美術に対する興味関心を高めるだけでなく、美術作品の価値を理解し、自分の創作に生かしていきたいという意欲を高める手立てがいろいろなかたちで実践され、子どもたちが保育や教育機関で生まれた美術に関する興味関心・知識・理解・技能技術をさらに発展させていることがわかる。

これまで人間が創りだしてきた文化遺産を理解させるため、鑑賞教育の手立てとして開発された鑑賞用ワークシートはどこの公立美術館で

も開発されている。見るべき視点が示されていたり、その作品のすばらしさが簡潔に理解できるように工夫されている。また、長期の休みに企画される「子どものための展覧会」もハンズ・オン形式の体験参加型で楽しく鑑賞する手立てがされている。

また、ギャラリートークも定着し美術館が教室となり、欧米型の鑑賞風景が見られる。また、出前授業や美術館探検隊など美術作品の鑑賞だけでなく、美術館の裏方である学芸員の部屋や収蔵庫、機械室まで探検することにより美術館に関わるいろんな職員がいることを学べる機会となり、美術を通して生きていくいろんな楽しみ方があることを伝えている。

現代美術の企画展では、出品作家とのワークショップなどが企画され本物の創作活動を展開している。子どもたち一人ひとりが、アーティストとなり、感性を働かせ、素材にふれ、材料・用具を駆使してイメージを深めながら創作する。

これは、ピクトル・ダミコのいう「子どもたちは、美術家として作品づくりできるよう援助しなくてはならない。素材と手法を研究しながら、自分が持てる限りの力を発揮して創作活動できなくてはならない。」を具体化している活動と言える。

創作活動は、問題解決学習の過程に共通している。表現したい主題を、どのように表現するか情報集めしながらイメージを膨らませ、それを作品として具現化しながら高めていく過程はまさに問題解決学習そのものである。

先に述べたアートを中心に40年間保育を実践しているイタリア・レッジョエミリア市からも創作活動の大切さが理解できる。

「レッジョ・エミリア市の挑戦、子どもの輝く創造力を育てる」(小学館発行)のビデオから、子どもたちの発言や考え方等を分析すると、アートを中心に据えた保育・教育することにより、発想力、創造力、表現力が身につくだけでなく、生きる力といわれる問題解決力や情報発信力・分析力、コミュニケーション能力、自己判断力や自主性等が育まれることが確認できた。

ただ、ここに至るまでにはいろんな取り組み

が行われ今日があると思われる。その一つが、子どもたちの発想を支える材料となる廃材やB級品の製品を「レミダ」という組織が回収し提供するなど、市民全体でアートによる子育ての大切さが理解されているからだと思われる。当然そうなるためには、保育者同士、保護者会、市民との対話集会やその成果の共有化など細かい手立てがあって可能にしていると思われる。

現地調査したチャイルドミュージアムと呼ばれる施設では、子どもたちの創造性を高め、夢や希望がもてる手立てがなされている。子どもたちの自主的な創造活動を支援するとともにアートを通じて生きることの楽しさや大切さが親子で体感できる工夫がされていた。また、本物に触れ、本物に近づきたいと思わせるようなアーティストのワークショップなども大きな役割を果たしていると感じた。

筆者が実践したワークショップでは、美術館、子ども創作館、地域の公民館と異なる場所でのワークショップを紹介した。それぞれの開催する場所により参加者のニーズが大きく異なり、そのニーズに合った内容のワークショップを開催する必要性や創作活動の役割も異なることが分かった。ただ、参加者は創造活動に強く興味関心があり、主体的に参加している。アートの可能性を信じ、アートと関わる心豊かな時間を、アーティストや他の参加者との関わりを大切にしている。社会における創作活動はそのような点からも大きな役割を担っている。

最後に、2009年3月財団法人地域創造の「これからの公立美術館のあり方についての調査・研究」報告書に、機能連携として「アートという言葉は、作品と人々の出会いにより生まれる状況のことを指す。昨今、多くのアーティスト達がワークショップやイベント型の作品に取り組んでいる。彼らは人々の関係性を問い、あるいは人々の出会いやコミュニケーションを誘発するツールとしてアートに取り組んでいる。アートが持つ『つなげる力』とは、こうした力のことをいう。中略

機能連携ではこの力のもとに、美術館が教育や福祉、あるいは観光等の分野と連携をなす。最近、こうしたつながりはクリエイティブなパートナーシップ(創造的な連携)と呼ばれて

いる。これは、社会に新たな活力をもたらす力のひとつである。」と述べられている。

30 数年前荒れた中学校では、イタリア・フィレンツェの繁栄を例に出し、花開いたルネサンス文化のように素晴らしい集団は、素晴らしい文化を持つという理念から、学校全体で合唱に取り組み学校を再生させた実践が多くあった。

今後も、アートの可能性を信じ、保育現場や学校教育の表現（造形）や美術教育だけでなく社会全体のアートのあり方についてさらに研究を深めていきたい。

## 註

- ・ミュージアム・マガジン・ドーム 1・11・18・26・54号（日本文教出版株式会社発行）
- ・ビクトル・ダミコ人間性の美術（こどもの城発行）
- ・浜田市世界こども美術館パンレット（浜田市世界こども美術館発行）
- ・現代美術の動物園記録集（浜田市世界こども美術館発行）
- ・きんぴアート・キット活用術（富山県立近代美術館発行）
- ・金沢 21 世紀美術館パンフレット（金沢 21 世紀美術館発行）
- ・こどものにわ展カタログ（東京都現代美術館発行）
- ・「レッジョ・エミリア市の挑戦、子どもの輝く創造力を育てる」教育ビデオ（小学館発行）
- ・「これからの公立美術館のあり方についての調査・研究」報告書（財団法人地域創造発行）
- ・大月ヒロ著子どもの創造力を育む日本と海外の 126 館新わくわくミュージアム（s s コミュニケーションズ発行）